

探究が蒔いた 未来の種

vol.1

僕らが

マイプロジェクトを始めたわけ

—それは被災地から始まった—

文部科学大臣表彰をかけて、全国250校の高校生が出場する「全国高校生マイプロジェクトアワード」をご存知でしょうか。探究型学習に取り組み高校生がそのアクションを競うイベントです。今号より約1年間にわたってお届けする連載では、高校生の取り組みがどんな未来を生み出したのか、マイプロジェクトが大切にしている価値と共に、実例を紹介していきます。



認定NPO法人カタリバ
マネージングディレクター
今村 亮

1982年熊本生まれ。東京都立大学卒。学生時代にNPOカタリバに参画し、凸版印刷を経て、2010年より現職。カタリ場事業、中高生の秘密基地b-lab、コラボ・スクールまじき夢創塾を立ち上げる。文部科学省熟議協働員、岐阜県教育ビジョン検討委員会委員を歴任。2019年現在、全国高校生マイプロジェクト事務局長。熊本大学・慶應義塾大学にて非常勤講師を兼務。共著「本気の教育改革論」(学事出版)。

「やらされ探究」を
「自分ごと化」する

皆さんは「全国高校生マイプロジェクト」をご存知でしょうか？ 高校生が地域や身の回りの課題や気になることをテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通じて学ぶ探究型学習プログラムです。

PBL(Project Based Learning)や探究型学習といえは、探究課題が用意されているプログラムが多いかもしれませんが、マイプロジェクトではテーマ設定に対する「主体性」を大切にしています。また、たとえ小さくても実際に「アクションを起こす」ことで、社会に揉まれ試行錯誤するなかから大きな学びが生まれます。

私たちがマイプロジェクトを提唱してから6年になりますが、もちろん、肯定的な声ばかりではありません。

「そんなの、うちの生徒には無理！」

「どうやって地域と連携するの？」

「先生方は忙しいから……」

それでも全国にマイプロジェクトが広がっている背景には、「やらされ探究」「操りアクティブラーニング」「お飾りPBL」の拡散に問題意識をもつ、熱い熱い熱い先生方の伴走があります。

ちょうど本号が全国に届いているこの季節は、第6回「全国高校生マイプロジェクトアワード」まただなか。「きみだけのドラマを語れ」という募集メッセージに、全国250校の先生方が3000人の高校生を送り出してくださいました。時代の変化を感じずにはられません。

高校生が支援される側から
支援する側へ

全国高校生マイプロジェクト事務局を運営しているのは、認定NPO法人カタリバ。「意欲と創造性をすべての10代へ」というミッションをきっかけ全国で活動する教育NPOです。

「全国高校生マイプロジェクトアワード」が始まったのは2013年のことですが、そもそもマイプロジェクトは2005年に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの井上英之研究会で生まれた手法です。僕は2009年に井上さんと出会い、時に政府の会議で、時にシアトルで、時に街角のカフェで教えを受けました。マイプロジェクトについて語る井上さんは、いつも自由で魅力的でした。

そんななか、東日本大震災が起きました。たくさん悲しいことがありました。東京で二丁スを見ていたカタリバは、い

てもたつてもいられず東北へ向かいました。初めは街頭募金で集めた寄付金を預けて帰ってくるつもりでしたが、甘かった。すべてを津波に奪われ、居場所を失った子どもたちを目の当たりにして、運命は変わりました。東北に居を移し、腰を据えて活動することに決めたのです。

宮城県女川町、岩手県大槌町で行政と連携し、被災地の放課後学校「コラボ・スクール」を開きました。あれから8年間が経ちますが、今夜も変わらず明かりを灯し続けています。

復興の道のりは並大抵ではありませんでしたが、希望がありました。それは高校生です。



アワード2017集合写真(2018年3月)



3.11を教訓に
防災活動に取り
組んだ岩手
県大槌町の
高校生たち
(2013年3月)



スタートアップ
キャンプの様子
(2017年10月)



18名の高校生のため初開催した
全国高校生マイプロジェクトアワード2013
(2013年12月)

マイプロジェクトとは

高校生が地域や身の回りの課題や気になることをテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通じて学ぶ探究型学習プログラムです。マイプロジェクトでは、プロジェクトのテーマ設定に対する「主体性」と、たとえ小さくても実際に「アクションを起こす」ことを大切にしています。

<https://myprojects.jp/>

2012年のある日、カタリバ東北事業ディレクター・菅野祐太が、井上英之さん大槌町に招きました。瓦礫が片つき、さら地になってしまった町で、先の見えない復興議論が続いていた時期です。大槌町で井上さんは高校生と語りました。すると彼らはぼろぼろと涙を流しながら、あの日から今日まで誰にも言えずかかえてきた想いを言葉にしました「自分たちも何かしたい」と。その涙がきっかけとなりました。高校生は大槌町の復興のためにマイプロジェクトを始めました。

と天文をテーマにしたナイトツアー。4年に一度みんなで建て替える復興木碑。伝統の手踊りの継承など…。高校生たちが汗をかき姿に、大人たちの心にも本気の火が灯り始めました。

**たった18人のための
第1回全国アワード**

不思議なことに、自分たちで何かを始めようという高校生の変化は同時多発的に起きました。気仙沼でも、石巻でも、宮古でも、南相馬でも、いわきでも、女川でも。彼らが地域を越えて出会い、交流する場が必要だと、企画されたのが第1回「全国高校生マイプロジェクトアワード」でした。学生時代からの恩師である鈴木寛さんに実行委員長をお引き受けいただき、「全国」と仰々しく銘打ってはみたくも、そんなちっぽけなイベント、当時は誰も知りません。結果的に集まった高校生はたった18人でした。

しかしこの18人が素晴らしかったのです！高校生だつて社会を変えることができる、誰もがそう信じられるアワードでした。私たちはこのアワードを本気で「全国」の運動にしよう、と固く決意しました。

そこで始まったのが「マイプロジェクトスタートアップキャンプ」でした。どんな環境にある高校生でもマイプロジェクトを始められるよう、きっかけを手にする場が全国に必要です。自分の課題意識を掘り下げ、プロジェクトのプランを作る鎌倉での合宿から始まって、東京・東北・九州・関西・北海道・オンラインへと拡がりました。

さらには「マイプロジェクトを取り入れたい」という要望を受け、学校・自治体への支援が始まりました。プログラムの提供やマイプロジェクトアワードの出張実施などの支援先は、川崎市、気仙沼市、雲南市。そしてふたば未来学園高校(福島・県立)、N高校(広域通信制・私立)、郁文館高校(東京・私立)と続いています。

この流れを大きく後押ししたのは文部科学省でした。高校の新しい学習指導要領に「探究」が位置づけられたことで、マイプロジェクトの目指す未来と国の方針が、不思議な偶然で合致し始めました。

2015年のアワードからは、文部科学省の後援を得て、グランプリに文部科学大臣表彰を行うことに。そして第6回目となるアワードが始まりました。2020年までに、全国1万人、そして高校生の1%となる3万人の高校生がマイプロジェクトに取り組み未来を目指しています。そこにはつひとつのドラマがあります。

マイプロジェクトを通して、生徒はいかにして探究のテーマを「自分ごと化」したのでしょうか？そして先生はどのように向き合い伴走したのでしょうか？また、取り組みんだ高校生は卒業後、どのように活躍しているのでしょうか？これから1年間、全国の現場から高校生と先生のドラマをお届けします。